

●シリーズ●わが町の文化財へ93

世羅町重要文化財 懸仏

昭和59年5月15日指定

懸仏（御正体）とは、仏教の思想で神道を解釈する考え方のつとり、神仏の融合体として日本で創られたものです。

一般的には、円形の板に銅板を張り、中央に本地仏としての仏像をあしらったもので、左右に花瓶などが取りつけられています。

左側は直径24cm、地板に金銅の板をはり、中央に合掌する菩薩形坐像を置き、左右に供花と花瓶けびょうを配し、下部に青海波を施しています。獅噛しがみ『しらかみ』ともいう）の金具は左右の彫成と大きさが異なり、右手の金具は後補と思われる。

右側は直径16cm、地板に金銅板をはり中央に毘（キリク）…阿弥陀如来の種子（しゅじ）（古代インドのサンスクリット語）を置いたいわゆる種子懸仏で獅噛はそろっています。蓮華座が欠損しています。2面とも室町時代中期頃の作と推定されています。

同社には社歴を物語るものとして、文和3年（一五三四）銘の御幣ごへいと永和4年（一三七八）銘の僧形八幡神像（いずれも北朝年号）などがあり、南北朝時代頃に同社の再興がなされたことをうかがわせます。



●シリーズ●わが町の文化財へ94

世羅町重要文化財 善法寺石群

昭和62年11月11日指定

この古石塔群は、本堂前に集められた宝篋印塔ほうきょういんとう五基及び五輪塔群で、寺域の一面に造立された石灰岩製の宝篋印塔一基、境内より100mばかり下方の参道脇の山林の中の三箇所にある大型の宝篋印塔及び大型の五輪塔、小型の宝篋印塔・五輪塔などの残欠群により構成されています。特に大型宝篋印塔一基は二段式で、笠は上部が八段（ふつうは七段）に繰られた珍しいものです。

そのほかは、数十基の石仏群を主体としますが、経塚や、境内に散在する宝篋印塔、五輪塔、石仏を含む石塔群です。古文書などに見られる善法寺の造営から衰退までの時期と、確認できる石造物の時期と合致しており、鎌倉時代後期から江戸時代までの様々な種類、形態の石造物が一箇所で見られるという意味でも、調査・研究の資料として貴重であり、郷土の歴史研究、石造美術研究の資料として高く評価されています。

これら古石塔群は、賀茂地域を支配した武士に関わる墓地とみられ、造立者として考えられるのは南北朝時代から、善法寺の護持に努めた賀茂一部地頭山内一族や賀茂浦壁城主の栗原一族などに関係のあるものと推定されています。

